

助成番号：404

ボン大学、ミュンヘンマックスプランク生化学研究所
ブタペスト大学における研究討議及び第8回世界免疫
会議出席、研究発表

斎藤 篤志

獣医学科家畜生理学講座

1. 目 的

ドイツおよびハンガリーとの人畜共通原虫病に関する研究打ち合わせと第8回国際免疫会議への参加並びに研究発表

2. 期 間

平成4年8月15日から平成4年8月30日まで

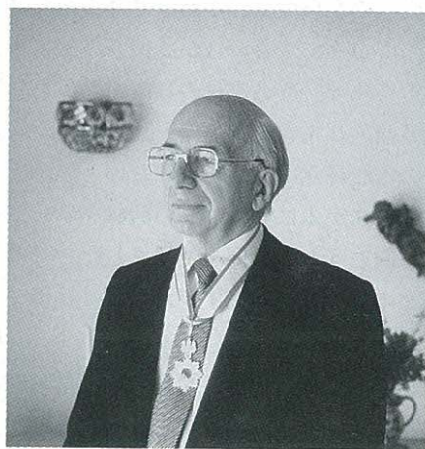
3. 場 所

ドイツ：ボン大学医学部・理学部(ボン)、ミュンヘンマックスプランク生化学研究所(ミュンヘン)
ハンガリー：ブタペスト大学獣医学部、ブタペスト国際会議場(ブタペスト)

4. 内 容

平成4年8月15日から19日までは、ドイツのボンに滞在し、ボン大学医学寄生虫病研究所長ザイツ博士、理学部動物学講座のエンテロット博士を訪問した。その間、ヒト及び動物に共通感染する原虫病、とくにトキソプラズマ病の免疫病態生理学的問題点に関し討議することが出来た。また、ボン滞在中に平成4年10月に逝去された高名な寄生虫学者ピーカルスキー博士にお目に掛かることが出来、日本とドイツの間での原虫病の共同研究に対するお考えを拝聴することが出来たことは今回訪独での大きな収穫の一つであったと言える。ピーカルスキー博士は人畜共通原虫病の分野で長年にわたって日本とドイツ間の共同研究、並びにシンポジウムの開催に尽力され、昭和58年に勲3等旭日中授章を受章されている。この報告書の中からもピーカルスキー博士のご冥福を祈りたい。

8月20日から22日の間はミュンヘンに滞在し、マックスプランク生化学研究所のハイドリッヒ博



ピーカルスキー ボン大学名誉教授

士と、8月23日から28日まではハンガリーのブダペストに滞在し、ブダペスト大学獣医学寄生虫学講座のカッサイ博士と人畜共通原虫感染症とくにトキソプラズマ症と後天性免疫不全症候群との係わりについて総合的に討議した。

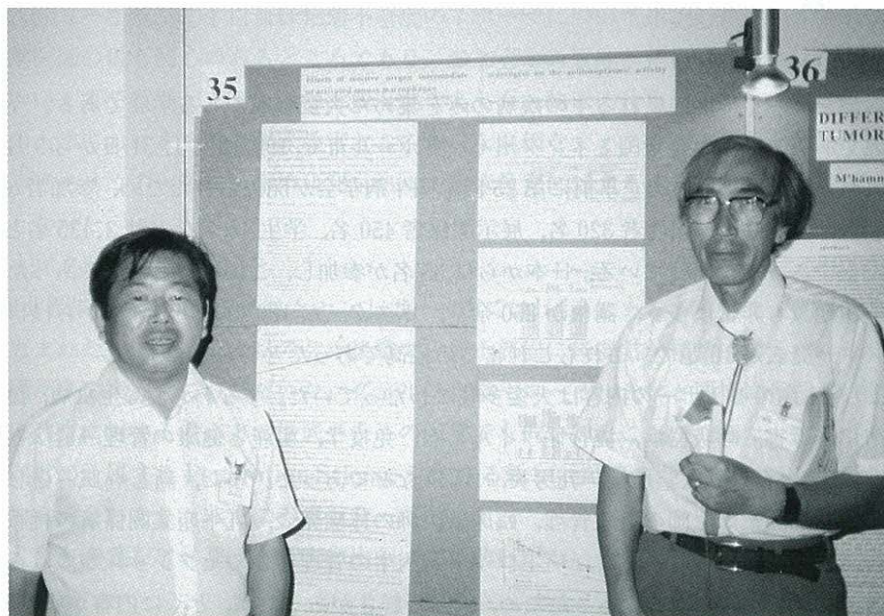
それらの討議の中で、特に、エイズ感染とトキソプラズマ併発感染に対する免疫賦活物質の延命作用とその作用機作について率直な討議が行われた。そして、それらの討議から以下の二つの共通認識を得ることが出来た。第1は宿主体内共生状態に

ある原虫の病原発現を遅延させるか惹起させない方策を検討すること、第2は宿主の免疫能低下の機構を解明し、それを抑える方策を開発することが現在直面しているヒトおよび動物のエイズ感染治療対策であると言う結論にいたり、世界の研究者と意見を交換できたことは非常に有意義であった。



マックスプランク生化学研究所の前にて

右から原虫病分子免疫研究センター長鈴木直義教授、生物資源学科島崎敬一助教授、一人おいてハイドリッヒ博士、生物資源学科三浦弘之教授、筆者



ブダペストの第8回国際免疫学会議会場にて